

映像アーカイブによる 中間的コミュニケーションの分析

原 田 健 一

1. 地域、メディア、アーカイブを結ぶ

1-1. 中間的コミュニケーションと映像メディア

映像がメディア化され写真、映画、ビデオといったモノになったのは、近代に入ってからである。映像の登場によって、人びとの日常生活に、写すものと写されるもの、そして、その映像を見るものという新しい人と人との関係性が生み出されることになった。また、映像は手元に置けるモノになることで、人びとの記憶を外在化し、一つの装置として社会的な役割を果たすことにもなった。

ところで、従来、映像というものを考えるとき、マス・コミュニケーションである映画や放送などの誰が見て分かるような一般的な解釈コードが付けられた映像や、芸術的な表現性をもった写真などの映像が扱われてきた。そうでないものという、パーソナル・コミュニケーションの領域にあるプライベートな家族写真といったものが考えられてきた。

しかし、「地域」という枠組みで、実際に、映像を発掘・調査してみると、マスとパーソナルな間の中間領域にある地域の行政や市町村のコミュニティに関わる映像が膨大にあり、しかも、それらは、あちらこちらに遍在し堆積し、人びとの生活や文化を維持する網目を織り上げていることが分かってきた。つまり、町や村の生活において道路や上下水道、電気などが必要なように、映像もまた同じように文化や記憶のインフラストラクチャーとして必要とされていた実態が分かってきた。つまり、社会において、中間的コミュニケーションとしての映像があることで、マスとパーソナルな世界をつないでいたことが明らか

になってきたのだ。

また、通常、映像には、生きていた人やものの個性性、痕跡がどこかに含まれている。それらは、写された人やものを知らない人にとっては、意味不明な要因となる。こうした一般化しないものを含んだ映像を近年の映像研究ではヴァナキュラーなものと呼んでいる。そして、問題にされるべき日常生活のマスとパーソナルをつなぐ中間的コミュニケーションの映像は、マスのように一般化されておらず、といって家族のように特定しにくい映像として、まさにヴァナキュラーなものとして現れることも分かってきた（原田，2013a）。

1-2. 日常生活世界の映像の集合化

2000年代に入り、映像のデジタル化という大きな趨勢、技術的な展開のなかで、「地域」で「映像」と「アーカイブ」を結合する研究方法は目新しい方法ではない。しかし、そもそも日常生活に遍在している映像とはどういうものなのか、人びとが映像をどう日常で利用し、生活しているのか。実際に調査し、集合化してこなかったことも確かであった。日常生活における映像を集積し、比較検討するアーカイブの手法によって、これまで十分に研究されてこなかった社会におけるさまざまなコミュニケーションのなかで映像がどう普及し、利用されているのかを実証的に明らかにすることが研究的に可能になった。私たちは、まず、日々の暮らしなかで利用しているなんでもない氾濫する映像に何があるのかを、調査することから始めてみる必要があるのだ。

人びとの日常生活を捉えるために、日常生活を考えるための道具として映像を扱うという考え方は、日常生活批判としての映像研究へと導いていく。それは自覚していない当たり前だと思っている日常生活のさまざまな行為、あるいはそれを支えている意識を自覚的に捉え直すことでもある。映像の内容を分析し、単に生活や世相の変遷を見るだけではなく、映像を通して日常生活、社会に生成する意味や意識、感情といったものを対象化するところまで研究を進める必要がある。

ところで、映像は写された内容において空間的なものが意識されるが、物質化した映像は時間軸に沿って社会的に展開する。通常、映像はモノ化したもの

として、過去の現実を再現するものとして捉えられる。映像がもたらす過去の記録、写された文化、習慣やしきたりといったことが重視されれば、歴史学や民俗学の資料の一つとして捉えることができる。通常、過去の映像が研究の対象になるのはこうした文脈である。

それに対して、こうした過去がモノとなることで、現実社会に何らかの形で機能していることを捉えると、社会学・文化人類学的な観点になる。人びとの記憶は、日々、現在進行形で記憶が構築されている。映像はこうした再構築において、常に参照されるメディアとして現実に関わり、時に動かしていく作用がある。

さらに、メディアが社会にいかに関与を与えるかという観点から映像メディアを捉えることもできる。これはメディア研究の視点となる。重要なのは、映像を写すことではなく、映像を残すことに社会的な意味があり、そのことを通して、さらには活用されることを通して、新たな社会のデザインが創発されることにある。この場合、何を、いかに、どう残すかが重要となる。こうしたとき、博物館学、あるいは情報図書館学も研究として関わっていくことになる。

こうした映像研究の領域の細分化は、社会における複合的な映像のあり方を総合的に捉えることを見失わせる。モノ化されたメディア化された映像は、過去・現在・未来の3つの異なった時間軸を内包している以上、それに見合うように研究領域も複数にわたる。また、それが媒介している社会の複雑なマスとパーソナルの関係だけでなく、その中間にあるコミュニケーションを捉えるためには研究領域を越境し、横断的な研究を進める必要もある。

当然のことではあるが、研究はそうした方向で進んでこなかった。今、こうした状況を批判してもたいして意味はない。重要なのは、メディアが社会に普及し、さまざまな関係性を複雑に媒介し現実を構成しているのに見合うように、研究的な蓄積を柔軟に交合し、再構築を始めることなのだ。

2. マス・コミュニケーション研究における研究的枠組み

2-1. 受け手,あるいはオーディエンス論からの視座

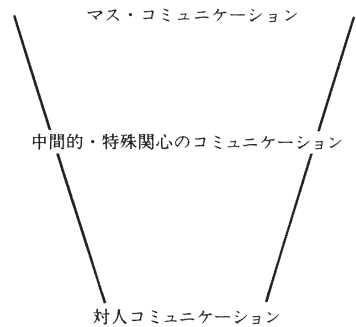
ここで、マス・コミュニケーション研究、あるいはメディア研究において、こうした問題がどう捉えられてきたのかをみておこう。

マス・コミュニケーションの理論研究を日本において主導した岡田直之は1988年の論文で、マス・メディアが社会の中枢神経系的な役割を果たしているとしつつも、1980年に山形市で行われた情報行動の調査を例にしながら、「マス・メディア以外の多種多様なコミュニケーション・メディアが現代社会の錯綜したコミュニケーションの網目を形づくっている」（岡田、1992、3）ことを改めて意識する必要があるとした。そして、マス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションの二つのカテゴリーだけでなく、その間にある中間的コミュニケーションを積極的に位置づける必要があるとする。そして、G・D・ウィーベを引き、コミュニケーションの受け手が量的に拡大するにともなって、対人コミュニケーションから中間的・特殊関心のコミュニケーション、さらにマス・コミュニケーションへと転化していくコミュニケーションの連続体があるとする。それは、パーソナルな対人コミュニケーションからマス・コミュニケーションへと移行するにつれて、「(1)送り手当たりの受け手の比率が漸次的により大きくなる、(2)伝達されるメッセージの性質がだんだんと私的なもの特殊なものでなくなり、ますます公共的で一般的なものになる、(3)コミュニケーション内容の多様性の範囲がしだいに狭まる、(4)受け手がただちに関心を示すことがだんだんとむずかしくなり、関心を引き起こすように刺激を与えてやらなければならない、(5)コミュニケーションの受け手は一般に送りにすぐに近づくにくくなる」（Wiebe, 1955, 163～164：訳岡田）とした。この指摘はマス・コミュニケーションの特徴をよく説明するものであるが、同時に、ヴァナキュラーなものの要因をもよく示している。つまり、相手を想定できる範囲にしたがって、伝達されるメッセージは私的で特殊なものでよく、また相手を知りその関心領域の幅が分かっている分、多様な要素を含んでいても理解が可能なものとなる。当然のことながら、コミュニケーションの相手として想定さ

れていない人びとにとっては、往々にしてそのことは分かりにくい原因となる。

そして、その中間的コミュニケーションの領域として、林進を引き「(1)自治体や住民団体などの組織によっておこなわれる地域コミュニケーション、(2)サークル、市民団体、企業、組合、PTA、政党などの組織によっておこなわれる地域コミュニケーション、(3)専門的関心に基づく専門コミュニケーション」(林, 1978, 22)があるとした。

図1 コミュニケーションのV字型モデル



(岡田, 1992, 5)

岡田はさらにその10年後の1998年の論文で、1980年代から1990年代に展開した能動的受け手論を検討し、その特徴を「受け手が日常生活世界のなかで、メディア内容を積極的かつ多義的に再文脈化し再解釈している点」(岡田, 2001, 177)にあるとし、その解釈論的転回のきっかけは、D・モーレイが『「ネーションワイド」番組の受け手』において民族誌的方法によって受け手の実像を明らかにした点にあるとした。さらには、その背景に「CATVやビデオ、さらにパソコン通信やインターネットなどの新しい双方向的な電子メディアの発展と普及において受け手のメディア環境や情報様式は多層化・多重化し、ユーザーは情報を受け取るだけでなく、受け取った情報を自己編集し、自前のデータベースを構築して不特定多数の人びとに情報を自由に発信することも可能になってきた」(岡田, 2001, 179~180)ことがあったとする。つまり、受け手を明らかにする新しい研究方法の出現だけでなく、多様なメディアの普及による社会の変化による受け手そのものの変容があったというのだ。

岡田は、能動的受け手論をめぐる論争を批判的に検討しつつ、受け手という概念の曖昧さを指摘し、その概念の基本はマーケット・カテゴリーに過ぎなかったと指摘する。そして、「受け手は日常生活世界において多様な社会関係や社会集団のネットワークのなかで相互に結合され相互作用を営んでおり、

受け手のメディア行動もそうした社会学的視座のなかで考察されなければならない」(岡田, 2001, 188)とし、この誰でもが分かっていることから議論をする必要があるとした。

この提言は受け手が、対人コミュニケーションから中間的・特殊関心のコミュニケーション、さらにマス・コミュニケーションへと転化していくコミュニケーションの連続体のなかで浮動し、その局面々々でさまざま姿をとって現れる存在であることを念頭においたものといってよい。岡田はこうした実態を捉えるための鍵概念として「解釈コミュニティ」を、「政治集団・経済団体・労働団体などの伝統的な組織集団のみならず、知識人の知的共同体・女性団体・消費者団体・少数者集団・エスニック集団・NGOやNPOなどのリゾーム状の連鎖や提携を社会的基盤にして形成され、開かれた対等なコミュニケーション行為を媒介に共同主観的に構築される意味の生産・創造・変換の場」(岡田, 2001, 195)として設定すべきだとする。当然のことながら、これはそのまま中間的コミュニケーションの領域と重なる。

ここで、メディア研究の立場から日常生活世界、あるいは社会を研究する立場へと視点を移動し、捉え直しておこう。つまり、人びとがさまざまな集団やコミュニティに重層的に所属し、さまざまな社会的、文化的な参照系を保持しながら生きている。そしてメディアはそうした関係性を媒介にしていることで、マス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・コミュニケーションの連続体のなかで移動し複層的に関係性を重層化させながら、人びとをして視聴覚データを保持させ、選択させ、時に産出させながら、記憶や文化を多義的に再文脈化し再解釈することを行っている。こうした総体を「解釈コミュニティ」として捉えるとするならば、それは局面々々で「曖昧な」関係性をもった受け手・オーディエンスを、そのまま「曖昧な」まま掴まえようとする概念として設定することができる。

ところで、この岡田の論文から10年以上たった現在の時点で、なぜ、こうした議論からその後研究は進まなかったのかを考えてみよう。つまり、能動的受け手論の研究的根拠となった、D・モーレイの『「ネーションワイド」番組の受け手』においてとった民族誌的方法のもつ限界性である。解釈論的転回の背景

にあった、量的調査方法から質的調査方法への組み替えという社会学的な枠組みそのものが、既に現実社会の調査方法として有効性を発揮しなくなっているのではないかという問いである。受け手・オーディエンスを捉え直す、新たな研究方法、あるいは枠組みを生み出す必要が、現在必要になってきているという問題である。

2-2. 地域メディア研究の視座

ここで問題を「地域」という具体的なレベルで考えてみよう。

ところで、これから考えようとする地域メディアとは国家という規模ではなく、「一定の地域社会の構成員を対象とするメディア」(大石, 2002, 581)のことである。そのメディアは、県域メディアといえる地方紙、地上波のNHKを含めたローカル放送であり、それより小さい範囲のケーブルテレビ局やコミュニティFMである。さらには地方自治体が刊行する広報誌や制作する映像、また地域のミニコミ誌なども入る。広義には、地域住民が交流する場所である、図書館、公民館、広場なども含まれることになる。

次にこうした地域メディアをどう捉えることができるか、いくつかの分類、類型をみてみよう。一つ目は、竹内郁郎によるもので、メディアの種類として①情報伝達の媒介をするコミュニケーション・メディアと、②交流するスペース・メディアとを分け、さらに③地理的な空間によって作られた社会的単位か、④成員間の共通性や共同性などによって作られた社会的単位の区別を組み合わせ四つに類型化したものである。地域が他の空間と違い、何らかの固有の場所的関係をもつのを指していることを考えれば、首肯できる類型といえる(竹内, 1989, 6~7)。なお、ここでは、竹内の類型を2007年の状況に合わせて整理した浅岡隆裕の図をあげる。

しかしながら、人びとがマス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・コミュニケーションの連続体のなかで浮動している実態を考慮すれば、ここでの枠組みはそうした姿形を捉えにくい難点をもっていることになる。

二つ目は、浅岡によるもので、今日の地域情報が誰によって、どのように生

図2 現在の地域メディアの諸類型

		「メディア」の類型	
		コミュニケーション・メディア	スペース・メディア
地域 の 類 型	地理的範囲をともなった 社会的単位	自治体広報、地域ミニコミ紙、 タウン誌、CATV、県紙、 県域放送 コミュニティFM、 フリーペーパー、 地域ポータルサイト、 携帯電話での情報サービス	公民館、図書館、公会堂、 公園、広場 情報センター、パソコン 教室・研修施設
	機能的共通性に基づく 社会的単位	サークル誌、ボランティアグル ープ会報、各種運動体機関紙 NPO・諸団体のホームペー ジ、特定地域の電子会議室・ ブログ・SNS	クラブ施設、同窓会館、 研修所

(注)「」は、新しく誕生したメディア。

(出所)竹内・田村 [1989, 7頁] に筆者が加筆・修正した。

(浅岡, 2007, 19)

成されているかに注目したものである。これは、現在のメディア状況のなかで、何らかの明らかな主体によって制作されたものと、無名の個人によって自生的なものが混在していることを、地域の領域にあてはめた区分である。それは、④既存のメディア事業として「自治体の広報や地域メディアの事業によって提供されるもの」と、⑤自生的なメディアとして「地域社会のなかのリアルな空間もしくは電子的な空間といったコミュニケーションの回路のなかで自生的に生み出されるもの」となる。④は行政や企業が行っているものであり、なんらかの事業の実効性や営利性が求められる。また、メディア事業の専門職がそれを制作する。それに対して、⑤は必ずしも専門職ではなく自己表現の一つとして自主的に行われる(浅岡, 2007, 26)。その意味で、実効性や営利性より、生成していること自体が重要な意味をもつ場合が多い。

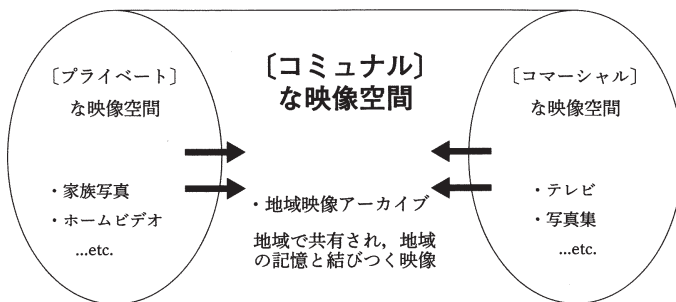
三つ目も、地域メディアだけに関わることではないが、その行為が④営利的なものなのか⑤非営利的なものなのかという区分である。二つ目の区分に従って述べれば、④の企業が行う地域メディアは営利的なものであり、自治体は非

営利的なものといってよい。しかしながら、⑥の自生的にボランティアに関わる人びとは時に、営利を目指し非営利なものとなっている場合もあり、その行為は必ずしも明確というわけではない。

ところで、四つ目であるが、水越伸はケータイのコミュニケーション空間についての批判的分析から、「私的なおしゃべりに終始する「極私圏」と、さまざまなモバイル・サービスやコンテンツの流通・消費とがやり取りされる「商業圏」」に二極化していることに対して、「開かれたコミュニティのかつ公共的な圏域を担う「コミユナルなケータイ空間」」の必要性を提起している。北村順生はこれを受けつつ、⑦極私的な家族写真やホームビデオなどのプライベートな映像空間と、④テレビや写真集などの商業的な消費の対象となるコマーシャルな映像空間の間に、⑤地域で共有され記憶と結びつく映像が集積され新たに交配するコミユナルな映像空間を創り出す必要があるとし、それが地域の映像アーカイブの役割だとする。これは、現在のメディア状況を受け、アナログカルに地域メディアの問題へと架橋したものである（北村，2013，234）。

この観点は、マス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・パーションの連続体が蓄積する視聴覚データを、中間的コミュニケーションに出口を設定することで、解体したコミュニティに代わりに新たなコミユナルな空間を創出するための場所を形作ろうとする試みといってよい。

図3 コミュナルな映像空間の概念



（北村，2013，235）

四つ目の観点は、インターネット上における映像アーカイブの問題から浮き彫りにされたことである。現在、インターネットの発達によって、個人でも情報の編集・加工し、例えば「You Tube」に投稿すれば全世界へと発信することができるようになったとされる。インターネットのシステムそのものが、ネットとネットをつなぐものである以上、全ての地域に発信、公開するグローバル（地球的な）なものとなる。それは、クローズドでローカルなやり取りに向いていないメディア・システムである。つまり、㊸非公開として全くインターネット上で公開しないか、㊹公開として全てインターネットで公開するかであり、㊺その中間の限定的な発信や公開、利用の可能性が閉じられているという問題である。インターネットのシステムの技術上の問題がここには横たわっている。どういった技術が開発されるべきか、探られる必要があるのだ。

こうしたとき、地域という他の場所とは違う固有の場所のもつ限定性は、今なお一つの枠組みとして有効である。一つ目の枠組みとしてみてきた㊻の交流するスペース・メディアとしての図書館、学校、広場といったものが、地域のなかで重要な意味をもってくる。コミュニカルな映像空間として、蓄積された視聴覚データを集積し、再交配する場所としての地域映像アーカイブは、こうした領域と関連をもって展開する必要がある。それは、インターコミュニティとしてコミュニティとコミュニティをつなぐものとして、コミュニティとコミュニティの間を活性化するものとして、創造性を生み出す可能な現実存在の一つとして物質的根拠となる。

どちらにしても、地域という枠組みで、人びとがマス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・コミュニケーションの連続体のなかで浮動している姿形をみようとした時、その重層的で複雑に絡み合った社会的な関係性、あり方は捉え方の違いによって幾様にも異なって顕れる。つまり、人びとはさまざまな複雑な関係性、社会制度やシステムとの関わりのなかでメディアの受け手・オーディエンスとなるからだ。その実態を明らかにする方法として、さらには新たなコミュニティとコミュニティとの関係性であるインターコミュニティの再構築の試みとして、現実社会に残されたマス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・コミュニケーション

の視聴覚データを集積・累積化し、新たに交配し分類することは、地域の映像アーカイブの研究的仮説であり方法となり得る。

3. 村落社会学の視座

3-1. 村の構造

次に、地域の中間的コミュニケーションを捉えるのに、まずその構成単位である町や村（コミュニティ）そのものがどう捉えられているのか、村落研究の成果をもとにして必要な範囲で整理しておこう。

日本の村落研究の端緒をなしている鈴木栄太郎は、村は集団や個人のいろいろな社会関係の集積であり、それらが相互に関係しあった累積体であるとし、その大きさに準じて小さいものから第一社会地区、第二社会地区、第三社会地区を重層的に形成しているとした。その示すものは、第三社会地区は1889（明治22）年の町村制によって生まれた行政村を指す。そして、第二社会地区が大字とか部落とか呼ばれ、江戸時代からの村であり、第一社会地区はその村のなかで組とか小字とかさらに分かれていたものを指した。鈴木は第二社会地区の村こそ人びとの日常生活の中心をなすものであり、自律性をもち「行政上の地方自治体やいわゆる聚落ではなくして、一つの自然的なる社会的統一である」（鈴木、1968、56）自然村であるとした。

そして、「集団が固定して存続すれば制度として個人を規制し、また社会関係も反復して一つの類型をなすに至れば、慣習としてやはり個人を規制する。それらはいずれも文化形象として個々の社会過程を制約する」とし、この自然村には「個々の社会過程を制約し、個人の行動・思惟・感情に一定の規範を与えている原則がある。それが精神である」とし、その精神は、「個人と現在を制御して全体と過去未来にしばりつける一個の発展的規範」（鈴木、1968、123～126）としてあるとした。つまり、村の自律性、自主性はこうした相互に制約する自足性によって発展が可能となる組織だというのだ。

有賀喜左衛門は、鈴木の「自然村」や「精神」という言葉を批判的に吟味し、自然村がそれを取りまく条件によって変化発展していることを鈴木が認めてい

ることを指摘し、規範や精神も変化するとして「発展的規範」の意味を問い直し、「村落が諸々の社会関係の凝集、複合した独自の社会的統一体であるとすれば、それに属する諸個人に規範として作用したとしても、諸個人は村落の外部から影響をうけたり、外部と結びつくことによって、村落を地盤とする新しい社会関係を創ることによって既成の規範と対決し、それをゆり動かしつつ、新しい規範を形成することによって、社会関係の変化を確実なものにして行く」（有賀，1971，161）とした。

村というのが内包する複雑な小さな字と字との関係や、村と行政村との関係だけでなく、そこに外部との関係、村と村との関係性を、有賀は想定している。つまり、外部との関係性そのものが村の重要な構成要素としてあり、発展の契機となっていることを示している。有賀は鈴木が自然村の自主性、自律性の根拠とする「氏神の祭祀・共有林野の存在、村仕事、娘に対する若者の権利、相互扶助、村ハチブ、入村慣行等」を、村をして社会統一体として成立させている要因であることを認めつつも、それらが内部的規範であるにしても、「この規範がただ内部的に規定されるのではなく、外部からもこれを規定するものを考慮に入れ」（有賀，1971，163）る必要があるとした。つまり、一見村の規範とみえるものも外部の政治的社会的文脈とのなかで形成されているとしたのだ。当然のことながら、近代的なメディアもこうした政治・社会的関係性を媒介する外部として機能していることは論をまたない。

3-2. 村と家連合

ところで、有賀は村と町（都市）を共通した基礎的な立場から捉える必要があるとし、共通した形態として家の集合体に着目し、そこから村を捉えようとした。家は小さな生活集団であり、安定した生活を維持していくためには他の家となんらかの形で結びつく必要があるからだ。その必要性は、例えば、村の生活で考えれば田植えや収穫の作業、道路や用水などの維持管理、冠婚葬祭など一個の家だけではできないことが数多くあることから分かる。どちらにしても、そうした生活の必要に迫られた家々の集合が聚落となり、さらに集積したものが村や町となる。そこで、こうした家々の結びつきを家連合と呼ぶ。

有賀は、この家連合を類型化し、「同族団」と「組」があるとする。同族団とは生活上一つの家に他の家が依存する関係にあり、つまり上下に結合する家々の関係であり、本末の系譜関係に結ばれる生活集団である。それに対して、組とは家が対等平等の関係において結合する生活集団であり、それゆえに組を組成する家々の間には相互に系譜関係をもたない生活集団となるものとした（有賀、1969、176）。

ここで注意すべきところは、概念として、同族は、通常、本家と分家によって構成される家々のまとまりであり、本末の系譜関係があるものを指す。そして、本家と分家に一定の秩序性がある場合を同族組織と呼ばれ、さらに上下関係、主従関係がある場合に同族団となる。なお、同族と親類は近いが、同じではない。親類は家の構成員の親族関係を基にしてなりたつ。本家と分家であっても、長い年月の間に親族関係から離れてしまえば親類ではなくなるが、同族であることには変わらない。同族と親類は、ほとんど重なるが同じではない（鳥越、1993、50）。

ここで、家連合の基である家について、整理しておこう。家族は人びとの生活の基本的な単位の一つであるが、「家」は日本独特の個別性を含んだ家族のあり方を指している。家の特徴は、三つある。

- ① 家は家の財産としての家産をもっており、この家産にもとづいて家業を経営している一個の経営体である。
- ② 家は家系上の先人である先祖を祀る。
- ③ 家は世代をこえて直系的に存続し、繁栄することを重視する。

つまり、家は直系的に存続することを大切にすると、家の永続という願いのため、あるいは経営体として成り立つためにある一定の労働力を必要とするために、養子などによって非血縁の人間を取り込む。その意味で、家は必ずしも血のつながりや婚姻関係によって形成される親族で構成されなくてよいものとしてある（鳥越、1993、10～13）。

3-3. 年齢階梯制と講組

次に、村において家を中心としない関係性として、年齢階梯制（年齢集団）と講組をみておこう。

年齢階梯制（年齢集団）

年齢階梯制とは、社会の成員を年齢によって区分し、何らかの社会的機能をはたすために階層化されたり、集団化されたりしているものである。日本の村においては、通常、子供組、若者組、中老組、年寄組に分けられる。

子供組は7歳前後に加入し、15歳前後に脱退するところが多く、その活動の中心は、小正月や雛祭り、七夕、地蔵盆など年中行事や祭礼に参加することである。

若者組は15歳前後から25歳頃、あるいは結婚までの間、村において家をかまえるいわゆる一戸前になるまでが普通である。若者組は土木や消防、祭礼など村でやる労働の中心を担うものであり、近代に入り国家の地方政策として青年団として組み込まれることになる。

中老組は戸主が中心であり村の運営の責任を負う世代であるが、それゆえに組織的な力は強くない。どちらかという、若者組の後見となることが多い。年寄組は隠居した人びとの集まりであり、講などをつくり宗教的な要素が強い。（鳥越、1993、148～158）

講と組

講は、「地域のなかで伝統的な資格などなく、各人がなにかの目的をもって結成した」（鳥越、1993、172）ものであり、必ずしも村の範囲内でかたまる必要はないが、村の大きさにあわせてできる場合が多い。講の本来的に宗教的なものを中心とし、伊勢講、庚申講、山の神講、田の神講、秋葉講、天神講、観音講、日待講などがある。これらの集まりは信仰的なものといえるが、実際は人びとが寄り合い、飲食して楽しむのが目的でもある。

それに対して、組は、鈴木所述べた3つの地区のうち第一社会地区にあたるもので、村の中で近隣の家々が集まった組織であり、必ずしも親縁関係に限定されず、「比隣四周の家並をもって、家々が一律的に一集団に編成される」（竹

内、1990、188) 村組や近隣組のようなものを指す。また、年齢階梯制で述べたように、若者組のように村の人びとが性別や年齢別に組織されるものも組と呼ばれる。そこで、本論文では、誤解が生じないように、組という場合は近隣の家々が集まった組織としてだけ指すことにする。

4. 村で映像を撮ることの実際

4-1. 玉梨村の構成と角田家

既に提示したマス・コミュニケーション研究と村落研究の枠組みをクロスさせながら、奥会津（奥只見）、新潟県と福島県の県境の金山町の村で、自分の部落の人びとを60年近く撮り続けた角田勝之助の映像（写真）を、角田が村社会の関係性のなかで、どう写真を撮り続けていたかをみてみたい。

まず、はじめに金山町玉梨村の構成を近隣の組織である小字、組からみておこう。現在の玉梨村は、川上、上中井、東中井、西中井、湯ノ上で構成されている。江戸時代の玉梨村は川上と川下に分かれており、川上は現在の川上であり、川下は西中井と湯ノ上にあたる。上中井と東中井は中井村とされており、地形的には野尻川沿いに上流から下流にかけて右側に川上、上中井、東中井とあり、川を挟んで左側に西中井、湯ノ上となる。1875（明治8）年8月に玉梨村と中井村が合併し玉梨村になり、1889（明治22）年の町村制によって統合され行政村としては川口村となる。その意味では、玉梨村が大字であり、鈴木の区分にしたがえば、第二社会地区の村ということになるが、実質的には川上と、中井村の上中井と東中井、川下の西中井と湯ノ上の3つの村で構成されているといってよい。

玉梨村は組としては5つに分けられ、さらにその組のなかの家々をみると、川上には栗城、坂内、五ノ井、佐々木、渡辺の同姓仲間があり、上中井には船城、長谷川、栗城の同姓仲間があり、東中井には中井、坂内、佐藤、高橋、角田の同姓仲間がある。そして、西中井には栗城、谷ヶ城の同姓仲間があり、湯ノ上には角田、坂内、栗城、坂内、谷ヶ城の同姓仲間がいる。

湯ノ上で角田家は同姓仲間の多い家である。角田勝之助の祖父角田長太郎は

上中井の船城家のトヨと結婚し、養子として岩吉を迎え、その岩吉が角田家本家をつぐことになった。その後、長太郎とトヨは弥一を生み、弥一がスギノと結婚後分家し、勝之助が生まれる。

この湯ノ上は、西中井から大峯山にあがった中腹を開墾した11戸の小さな村で、水に乏しく畑作と林業、あるいは狩猟を生業とする。しかし、大峯山の裏には水量が豊富な白沢川上流の高野沢があり、この水を引くことで畑を水田化することができる。角田勝之助の祖父長太郎が中心とな

り湯ノ上村民は、1887（明治20）年から1901（明治34）年の15年をかけて、山腹にトンネルを掘り水路を作る工事がやりぬく。このトンネルである洞門から湯ノ上と西中井へ水路が引かれ、湯ノ上と西中井は水の管理運営をすることを通して、さらに村同士の強い結びつきをもつことになる。

玉梨村は大字として、共用林をもち共用林組合などをもち、道普請や祭礼などを行い、一つのまとまりをもっているが、西中井と湯ノ上は洞門を通した水利関係などがあり強い結びつきをもち、講なども2つの村で行うなど自律性をもつ。

図4 角田勝之助家系図

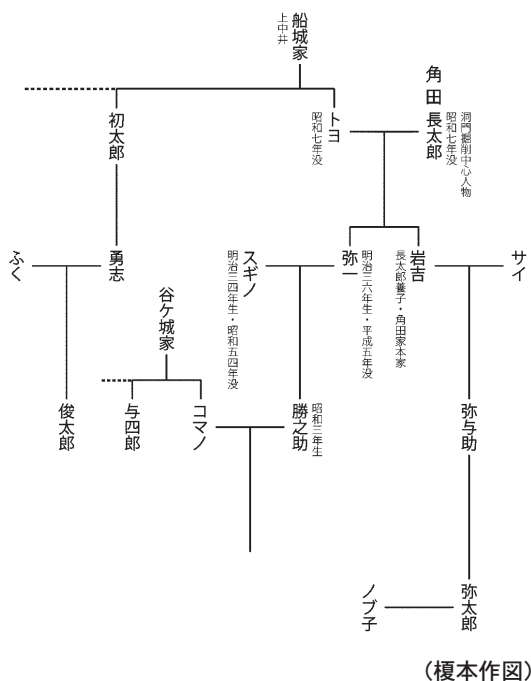


図5 大字玉梨と小字湯ノ上の行事（平成26年度）

開催日	大字玉梨行事	小字湯ノ上行事	概要
4月		坪総会、洞門、中山間組合総会	部落総会、水利権会合、耕地管理
4月24日	火祭り		
5月5日	節句：子供の日		
5月6日	午前：山道、午後：往還普請		道路管理・整備
5月8日		洞門堰普請	水道管理
5月20日	雷神祭		
6月1日	宮道普請、早苗振		鹿島神社宮道管理・整備、田植え休み
6月8日	第1回一斉消毒		
6月24日	火祭り		
6月30日		中山間刈払い	水田草刈り
7月6日	山道刈	午後：水道掃除	
7月21日	土用二郎		土用に入った2日目、餅をついて休む
7月27日	第2回一斉消毒	不動様祭	
7月31日		愛宕様道普請	愛宕神社道路管理・整備
8月1日	愛宕祭		
8月7日		洞門掛口掃除	水道管理
8月10日	お盆道普請		
8月15日	お盆：お護摩		
9月4日	宮道普請	仁渡神社御籠り	
9月5日	鹿島神社祭礼		
9月10日	胡桃落とし山ノ口		胡桃採り解禁日
9月20日	彼岸入口：寺参り		
9月23日	彼岸中日：秋分の日		
10月1日	お上り		
10月5日	稲刈り休み：飯豊講：観音講		
10月10日	虫供養		
10月19日	中の旬日		
11月1日	お下り		
11月9日		飯豊講	飯豊山の山霊を信仰する山岳信仰の講で、豊作祈願を目的とする。湯ノ上、西中井、上中井、東中井共同で開催。
11月15日	鹿島神社初穂祭	常楽寺・四節の護・麻初(秋日待ち)	寺行事
12月1日	水神祭		
12月8日	御八日講	御八日講	出羽三山信仰で、山中安全、五穀豊穡を祈願する。湯ノ上、西中井共同で開催。
1月1日	元旦：年始会		
1月8日	寺年始・御日待		
1月		湯ノ上年始会	
1月15日	望歳(もちどし)：小正月		
1月20日	御護摩		
1月24日	火祭り：古峰ヶ原講		
2月1日	春祭り		
2月11日	大字初総会・共有権 初参会		共有権：山林共有財産権
2月12日	山神祭：山ノ神講		
2月24日	火祭り		
3月3日	節句：ひな祭り		
3月9日		古峰ヶ原講・山ノ神講	古峰ヶ原講：古峯神社信仰の講で、火防の神を崇敬。山ノ神講：山の精霊に山の恵みと作業の安全を祈願する。湯ノ上部落単独で開催。
3月18日	彼岸入口、寺参り		
3月21日	彼岸中日：春分の日		

※毎月24日は火祭り＝消防の日
(村で作成している年間行事表をもとに作成した。)

4-2. メディアと青年団

ここで、角田勝之助の聞き取り（「村」に暮らす、「村」を写す）を参照しながら、1952（昭和27）年に初めて購入したカメラ、ウィルミー6で撮影した1952年から1957（昭和32）年頃の写真である711枚を中心に分析してみる。

角田勝之助が生まれたのは1928（昭和3）で、物心つく頃には家にはプリントした写真があったと思われる。川口国民学校を卒業した1943（昭和18）年頃に写真に興味を持ち始め、玩具のようなカメラなどで撮影し、翌年にはカメラを注文している。こうした時、写真（映像）についての情報源は新聞、雑誌、ラジオなどのマス・コミュニケーションであった。角田は写真の現像などの技術について本や雑誌で習っており、その後もラジオの製作、テレビの修理技術、ビデオなども本や通信講座などで学んだとしており、こうした中山間地域におけるメディアとの接触、利用の一つのあり方を示している。

実際に角田がカメラを購入し手にしたのは、敗戦後の1951年頃でその翌年から実際の写真が残されている。ところで、この角田がマス・コミュニケーションから映像（写真）の知識や技術を受容し、取り込み、自ら映像を製作する送り手へと変貌する時、それを受け入れる人びとは村の誰だったのか、地域におけるメディアの普及という観点においては非常に重要な問題といえる。

角田の最初の頃の写真を見ると、移された人びとは圧倒的に若い男女が多い。占領期のこの時期、日本全国で引き揚げ者なども多く村々では人で沸き返っており、玉梨村でも10代後半から20代前半の若い男女が多くいた。ところで、この地区では、玉梨村の近隣の八町村と学校が同じであったこともあり、青年団はこの二つの村で一緒に構成され約200人近くいた。これらの若い男女を中心とした青年団の活動は、戦争が終わった解放感もあり極めて活発であった。

角田がカメラを入手した1951年には26歳で、その翌年の1952年2月には湯ノ上の谷ヶ城コマノと結婚し、11月には長男・勝志をもうけている。青年団のなかでは、明らかに年齢的には上であり先輩格であったといえる。また、角田勝之助の父弥一は翌1953年には玉梨村の区長になっており、洞門を開いた家として村の中でそれなりの地位にあったことはうかがえる。

しかしながら、角田の写真からはそうした家の格はうかがうことはできない。写真を見てすぐに気づくのは、仲間との関係性である写すものと写されるものとの関係が重視されており、写す角田勝之助の個性より、写して欲しいという写される人びとの個々の思いが大切にされている。イニシアティブは、写す人間ではなく、写される側に明らかに移っている。既に述べたように、マス・コミュニケーションにおいてはマス（多くの人びと）を相手にするために、なんらかの一般解釈コードを映像に付与しないと理解不能なものになってしまう。そのことは、そのままマス・コミュニケーションにおいて送り手の側に表現のイニシアティブがあることと結びついている。マスから中間、パーソナルなコミュニケーションへと移行するにしたがって、写す側から写される側へと表現、表出のイニシアティブはゆるやかに移動していく。このゆるやかな移行の過程を中間的なコミュニケーションのなかで、どういう社会的意味を派生させているのかが、映像分析の一つの課題になる。

ここでは、写す側と写される側が出会う場所（トポス）に注目してみる。当時、青年団の会合は月2回程度、学校、神社などでの集まり、その後、玉梨温泉に皆で入るのが楽しみであったというが、200人が一緒に入れる風呂があるわけではなく、外である橋の上などで待つ時間が男女の出会いの場になっていた。つまり、学校や神社、橋と温泉の3つの場所は、スペース・メディア（図2参照）として青年団の男女にとって出会いの場でもあり、そのまま写す人と写される人が出会う場所でもあった。村の若い男女にとっては、小さな頃から知っている間柄ではあったが、おめかしをして新たな男女の出会いを楽しむ場であり、写真はそうした自分たちの気持ちを高揚させる道具（メディア）としてもあった。角田の写真は、青年団の若者たちと寄り添うように村の男女を写し続けており、送り手である角田勝之助は写真を受け手である村のこうした若者たちに渡しており、角田の写真が若者たちの関係性の触媒のような働きをしていたことが分かる。

さらに、青年団は村でやるさまざまな仕事の中心であり、道普請や玉梨村の郷社である鹿島神社の祭祀や、夏の盆踊り、消防団など実質的に行っていた。角田の写真もそうした活動に併走するように、また、撮影し続けることになる。



橋の上 左から (TK-P-001-005-11) (TK-P-001-005-01)

(TK-P-001-005-10)



学校 (TK-P-001-006-03)



神社 (TK-P-001-010-08)



(TK-P-001-010-02)

1953～1955年頃



鹿島神社の祭
(TK-P-003-020-07) 1961. 9. 1



鹿島神社での盆踊り
(TK-P-003-015-04) 1959. 7



消防団 (TK-P-002-003-15)
1955～1957年頃



上：村芝居
左（TK-P-002-007-19）
右（TK-P-002-007-04）
下：バンド
（TK-P-002-007-05）

1955～1957年頃

ところで、青年団は村の伝統的な年間行事に関わるとともに、村の新たな楽しみを担う存在でもあった。青年団のメンバーが自ら村芝居を演じたり、巡業する旅芝居の一座を呼んだりということをしている。さらにはバンドを結成し、玉梨村だけでなく、他村へと演奏旅行をしている。角田勝之助は、バンドマスターが妻の弟の谷ヶ城与四郎であったこともあり、芝居や音楽など、こうした青年団の文化的な活動に関わっていた。

こうした青年団の遊戯的なコミュニティとしての性格は、地域メディアの類型にしたがって分析すれば、地域的な枠を持ちつつ、趣味や嗜好を共有した仲間・サークルとしての役割を果たし、村の学校や広場などのスペース・メディアを活用した活動をおこなっていたことになる。そして、こうした青年団の活動を映像が媒介していることは、映像の利用、普及において、コミュニティの遊戯的側面から広がっていったことを明らかにする。その点では、幕末から明治の最初に六日町で地芝居を演じている若者組の人びとを写した今成家の写真との共通性をみることができる（原田，2013，8）。

従来、村々（コミュニティ）に文書類が残されてきたのは、基本的にはもめごとを解決したり、取り決めをするために残されてきたといってよい。近代以降、こうした映像に求められているものとは、違ったものだった。その意味で、文書と映像とのアーカイブの性質の違いも大きなものがあるとしなければならない。

4-3. メディアと組、会社

玉梨村において、映像の受容は年齢集団である若者組（青年団）を母体とし普及しており、家を中心とした家連合である同族組織から広がっていないことは注意する必要がある。当然のことながら、角田勝之助の初期（1953～1957年）の写真に自分の家族である妻や子供を撮った写真がないわけではない。しかし、家族の写真は限られており、さらには自らの同族・親類の写真も必ずしも多くはない。どちらかというの家を維持するために、近隣組織の組である湯ノ上、あるいは湯ノ上と西中井の人びとと協同する作業の写真が目につく。国有林からの春先の薪出しや屋根を葺くための萱刈は湯ノ上と西中井でのユイとしての作業であろうが、そうした関係性をもとにして国有林の伐採作業などを請け負っていたことはみえてくる。あるいは、田植えや稲刈り、さらには結婚や葬式は近隣の家々の集まりである組の協力をもとにしている。

写された映像は、親族的な関係性を軸に展開するというより、組としての協力関係を軸に広がっている。家族写真が「家」という枠が枷となり広がりにくい構造をもっているのに対して、近隣組織は家どうしの協力関係をもとにさまざまな社会的な関係性をつくりやすいことは、メディアのコミュニケーション・ツールとしての媒介性を発揮しやすいものといえる。青年団を卒団し、一戸をかまえた壮年、あるいは老年の村人にとって、近隣組織はさまざまな役割をになっているといってよい。

ところで、角田によれば、1950年代の玉梨村での生業は、田畑と国有林などでの作業や、ナメコ栽培などであったという。こうした状況が大きく変わるのは、1964年4月に角田が谷ヶ城建設工業に写真係として入社してからである。

谷ヶ城建設工業は、1927（昭和2）年に西中井の谷ヶ城嘉一が製材業を始め、



薪出し (TK-P-001-027-15)



国有林での伐採 (TK-P-002-015-04) (TK-P-002-007-03)
1953～1957年頃



萱刈 (TK-P-002-003-18)



稲刈り (TK-P-002-009-20) (TK-P-002-012-10) 1955～1957年頃



結婚 (TK-P-001-013-08)
披露宴 (TK-P-001-017-03)
1953～1957年頃



葬式 (TK-P-001-013-08) (TK-P-001-013-08) 1965年



谷ヶ城建設工業 (TK-P-003-002-03)
1963 (昭和38) 年頃



上 (TK-P-005-005-01)
下 (TK-P-003-007-08)

1960 (昭和35) 年7月に会社となる。1969年8月の只見川流域の水害を契機に、会社は土木関係の工事を中心に請負い、1970年代に急激な成長をとげる。

最盛期には約200人近い社員がおり、その大半は玉梨村の人びとであった。新たに谷ヶ城建設工業という会社組織の中で、村の関係性が再組織化されたことになる。それが、こういった形のものであったのかは、1960年代以降の映像をもって解読されるべき課題といえる。

そして、会社の繁栄とともに、組の相互扶助的な側面が解体していったことなどの変化や、角田自身の中高年齢化にともない子どもを通した親同士の関係性が重要となったり、宗教的な講などの役割が大きくなっていくことなども、今後の分析の課題となるだろう。

5. まとめ

村の構造は、小字である組、大字である村、明治以降の行政村に階層化されているが、その基本構造は家と家との連合が大きな結び目となっていた。こうした家連合を中心とした関係とは別に、年齢別の若者組 (青年団) などの結び

つきがあり、さらには講などの宗教的な結びつきなどが、多層的に複雑に絡み合っている。

角田勝之助はこうした村の構造のなかで、若者組（青年団）を中心とした遊戯的コミュニティから、写すもの、写されるもの、その映像を見るものという関係をたぐり寄せていったといえる。こうしたメディアの受容の母体となったコミュニティの遊戯性は、家の連合である同族（親戚）などの関係性より、組などの近隣組織により親縁性があることが、次にみえる。それが角田にとっての仲間であり、写真というメディアを共有することができる人びとであった。

つまり、映像メディアが普及する関係性は、村の構造の中心である家々の連合の同族性より年齢集団や近隣組織を中心に展開する。それは村の構造の中心である家連合の流れとは微妙にずれた関係性を媒介する。そのことがはらむ社会的意味とは何なのか。さらに村における会社という新たな関係性は何をもたらしたのか、あるいは家々で孤立している家族写真が村のコミュニティに浮上してくるのは、子どもが成長し親同士で学校での新たな関係性が始まってからであることの意味は何なのか。地域の映像を集積し、比較研究する映像アーカイブの今後の研究、分析がさらに展開する必要がある。

この調査・研究は平成26年度電気通信普及財団研究調査助成を受けています。

引用参考文献

- 有賀喜左衛門, 1969, 「都市社会学の課題」『有賀喜左衛門著作集Ⅷ』未来社
 有賀喜左衛門, 1971, 「村落の概念について」『有賀喜左衛門著作集Ⅹ』未来社
 浅岡隆裕, 2007, 「地域メディアの新しいかたち」田村紀雄・白水繁彦編『現代地域メディア論』日本評論社
 林進, 1978, 「社会的コミュニケーション・システムの変動と中間コミュニケーション」コミュニケーション研究会『社会的コミュニケーション・システムの変動』埼玉大学教養学部
 原田健一, 2013a, 「事例としての「にいがた」— 地域の映像をめぐる4つのフェー

ズー」原田健一・石井仁志編『懐かしさは未来とともにやってくる－地域映像アーカイブの理論と実際』学文社

原田健一, 2013b, 「地域・映像・アーカイブをつなげるための試論」原田健一・石井仁志編『懐かしさは未来とともにやってくる－地域映像アーカイブの理論と実際』学文社

北村順生, 2013, 「地域メディアと映像アーカイブをつなげる」原田健一・石井仁志編『懐かしさは未来とともにやってくる－地域映像アーカイブの理論と実際』学文社

岡田直之, 1992, 「現代社会のコミュニケーション構造」『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会

岡田直之, 2001, 「合理的市民像の現代的文脈－能動的受け手論をめぐって－」『世論の政治社会学』東京大学出版会

大石裕, 2002, 「地域メディア」北川高嗣他編『情報学事典』弘文堂

鈴木栄太郎, 1968, 『日本農村社会学原理（上）』（『鈴木栄太郎著作集Ⅰ』未来社）

竹内郁郎, 1989, 「地域メディアの社会理論」竹内郁郎・田村紀雄『新版・地域メディア』日本評論社

竹内利美, 1990, 「組と講」『竹内利美著作集Ⅰ 村落社会と協同慣行』名著出版

鳥越皓之, 1993, 『増補版 家と村の社会学』世界思想社

Wiebe, G.D., 1952, 'Mass Communications', in E.L.Hartley and R.E.Hartley, "Fundamentals of Social Psychology", Alfred A.Knopf.